

Ⅲ.

主権者教育の一環としての模擬選挙の実施

隅田久文

【抄録】2015年の公職選挙法改正により、選挙権年齢が満18歳以上に引き下げられた。これにより、学校現場において主権者教育のより一層の充実が求められているが、今年度本校では第24回参議院議員通常選挙に合わせて模擬選挙を計画し、実施した。

【キーワード】選挙権年齢引き下げ 主権者教育 模擬選挙

1. はじめに

2015年の公職選挙法改正により、選挙権年齢が満20歳以上から満18歳以上に引き下げられた(2016年6月施行)。選挙権年齢が引き下げられるのは、実に70年ぶりのことで日本政治にとって大きな改革となったわけであるが、学校現場にとってもその対応に迫られることとなった。すなわち、主権者教育のより一層の充実である。

2015年に、総務省・文部科学省が作成した主権者教育用の副教材『私たちが拓く日本の未来』(以下、「副教材」という。)が全国の高校生に配布された。また、筆者は2015年に東京で開催された選挙権年齢の引下げへの対応に関する連絡協議会に出席し、全国の取り組み事例を知る機会を得た。その内容も踏まえた上で、副教材の内容を生かした主権者教育の実践、具体的には実際の選挙に合わせた模擬選挙の実施を行うことにした。本稿の内容は、主権者教育の一環としての模擬選挙の実践報告が中心となっている。

2. 副教材の概要と筆者の過去の実践

総務省・文部科学省が作成した副教材は、選挙の仕組みや意義をまとめた解説編・具体的な学習方法・学習活動例を示した実践編・Q&Aなどの参考編の三部構成となっているが、特に実践編に多くのページが割かれている。

実践編では、具体的な学習方法として、「話し合い、討論の手法(ディベートなど)」、「模擬選挙」、「模擬請願」、「模擬議会」が提示されている。その中で、今回筆者が取り組んだ「模擬選挙」に関しては、架空の候補者を立てて投票を行う「架空の選挙」と「実際の選挙」の実施時期に合わせて投票する方式の二種類に分けて実践例が示されている。

「架空の選挙」については、副教材では「未来の知事を選ぼう」という実践例が示されているが、筆者は別の

内容で中学3年の社会(公民的分野)および高校2年の現代社会もしくは高校3年(政治経済)で過去数年間実践をしてきたので、以下には具体的な実践(2015年度中学3年および2014年度高校2年)を示す。

(1) 中学3年(社会科公民的分野)

2015年度の中学3年は、「選挙の意義としくみ」という単元で実施した。まず、全生徒に授業中に「自分が首相になったらどんな政策を打ち出すか」という課題を模擬選挙のことはあえて言わずにあらかじめ実施し、全生徒の中からユニークな政策を考えた生徒を筆者がクラスごとに5名選定し、架空の候補者として演説をさせた上で模擬投票を実施した。模擬投票は、クラス内5名の候補から1名を選ぶ単純小選挙区制で実施した。

(2) 高校2年(現代社会)

2014年度の高校2年(現代社会)では、「選挙のしくみと課題」という単元で実施した。模擬選挙の実施をあらかじめ伝えた上で、冬休みに「マニフェストを一つ考えてくる」という事前課題を課した。その際、筆者の方から6つの架空政党を提示し、生徒はその中から一つを選び、架空政党の考え方を反映したマニフェストを考えさせた。全生徒の中から架空政党ごとの候補者数のバランスを考えながら、クラスごとに候補者を選定し、架空政党ごとの代表者6名に演説させた上で模擬投票を実施した。模擬投票は、クラスを3分割した小選挙区制、クラス全体を選挙区として定数3の大選挙区制、学年全体を単位として定数9の比例代表制の3種類を同時に実施し、同じ投票でどのように投票結果が変わるかという比較を行い、選挙制度の違いを知ることも学習の目的とした。

模擬選挙のもう一つの種類である「実際の選挙」に合わせて投票する模擬選挙に関しては、今まで筆者は実践をしたことがなかった。副教材の作成協力者の一人であ

り、模擬選挙推進ネットワーク事務局長の林大介は、「架空の選挙」は選挙制度を学んだり、投票方法を体験することができるが、内容に現実味がなく「体験」に終始してしまう側面があることを著書で指摘している（注1）。一方、「実際の選挙」に合わせて投票する模擬選挙に関しては、実施時期が限定されてしまうこと（年間指導計画で想定した時期に選挙があるとは限らない）や公職選挙法等への配慮の必要などの制約はあるが、単なる「体験」だけではなく、実際の社会動静について自分たちなりに考えることが目的となる（注2）。

従来から筆者が実施してきた「架空の選挙」に関して選挙制度の違いを学ぶことなどができ、学習としての意義は決して低くはないが、「実際の選挙」に合わせて投票する模擬選挙であれば模擬選挙を通して日本の諸課題についても自ら考えることができ、その効用は大きい。そうした観点から、今回の選挙権年齢の引き下げに合わせて新たな試みとして、第24回参議院議員通常選挙に合わせて模擬選挙を計画し、実施した。

3 参議院選挙に合わせた模擬選挙の計画・実施

2016年7月10日（日）に投票が行われた第24回参議院議員に合わせ、投票日直前直前の週に模擬選挙を実施した。その際、副教材の「実際の選挙に合わせて模擬選挙をやってみよう」を参考にした。以下に概要を示す。

(1) 実施の目的（生徒に示したものである）

第24回参議院議員通常選挙から選挙権年齢が満18歳に引き下がる。高校3年生に限らず、現在本校に在籍している生徒は全員が本校在学中に有権者となることになる。実際の選挙を活用しての模擬選挙を実施することで、政治への関心を高めることが目的である。

(2) 実施の概要

1) 対象

筆者が授業を担当している中学3年生・高校1年生全員（約200名）を対象とした。

2) 校内投票日

7月5日（火）、6日（水）、8日（金）の昼休み及び放課後に実施した。実際に投票に赴くということを体感させるために、授業時間外に実施をした。

3) 投票内容

第24回参議院議員通常選挙愛知選挙区（定数4）の模擬投票を実施した。参議院の比例区は非拘束名簿式であり、開票作業が煩雑になることから、今回は選挙区のみの実施とした。

4) 投票所

より実際の選挙に近づけるために第1会議室を使用した。

また、副教材に投票所における投票の流れがイラストで掲載されていることも踏まえ、実際の流れにできるだけ近づけた。

5) 投票に関する作業

選挙管理委員・社会科系の生徒に協力を仰ぎ、投票所の運営（名簿対照係・投票用紙交付係・投票立会人・投票管理者）および開票作業を担わせた。開票作業は、実際の選挙の当選者が確定した後の7月11日（月）に実施し、後日全生徒に投票結果を公表した。

6) 外部機関との連携

名古屋市選挙管理委員会に実施の上で助言を仰ぐとともに、生徒分の選挙公報の提供を受けた。また、模擬選挙推進ネットワークが、ウェブ上で無償提供を行っている模擬選挙用の投票用紙を活用した。また、本校の投票結果については模擬選挙推進ネットワークに情報提供した。

7) 留意点

- ・民主的な選挙の4原則（普通・平等・直接・秘密）の遵守を徹底した。
- ・保護者向け案内文書を作成、配布した。その際、副教材配布時に教員に配布された『活用のための指導資料』に記載されている「保護者向けお知らせの例」を参考に作成した。
- ・実施の上で、公職選挙法等の趣旨を踏まえ、政治的中立性を確保すべく配慮するとともに、生徒へも事前指導を行った。

8) 模擬選挙実施スケジュール

6月27日（月）	保護者向け案内文書配布 係生徒打ち合わせ
7月2日（土）	選挙公報受け取り （名古屋市選挙管理委員会）
7月4日（月）	選挙公報配布 事前指導
7月5日（火）	投票所入用整理券配布 模擬選挙1日目
7月6日（水）	模擬選挙2日目
7月8日（金）	模擬選挙3日目（最終日）
7月10日（日）	第24回参議院議員通常選挙
7月11日（月）	開票作業
7月13日（水）	結果公表

(3) 模擬選挙の結果

1) 投票率

クラス	投票率	クラス	投票率
J3A	100.0%	S1B	100.0%
J3B	100.0%	S1C	95.0%
S1A	92.5%	全体	97.5%

投票の出足は好調で、1日目終了時点で全体の投票率は46.8%を記録した。最終的には全体の投票率は97.5%を記録した。今回初めての試みということもあり、生徒の関心は、筆者が想定したよりも高かった。

2) 投票結果

候補者	政党	模擬選挙 得票率	実際の選挙 での得票率
中根ひろみ	幸福実現党	3.1%	1.4%
井桁まこと	(注3)	3.6%	1.8%
里見りゅうじ	公明党	19.0%	15.8%
奥田かよ	減税日本	7.2%	6.5%
すやま初美	日本共産党	7.2%	9.0%
平山良平	社会民主党	6.2%	1.9%
伊藤たかえ	民進党	21.5%	15.4%
藤川正人	自由民主党	13.8%	28.6%
斉藤よしたか	民進党	15.9%	17.1%
無効		2.6%	2.6%

投票結果については、実際の選挙で当選した4名が模擬選挙においても、順位こそ違えど、1位から4位を占めた。すなわち、模擬選挙の結果と実際の選挙結果は極端な差異は見られなかった(注4)。なお、模擬選挙の結果分析については、本稿の主目的ではないので、割愛する。

3) 生徒の感想

- ・候補者の政策とかをきちんと読んだのは初めてだったので、興味深かった。
- ・なかなかやれないことだし、選挙公報は見たことがなかったので、物珍しさもあり、楽しかったし、勉強になった。ただ、公報を見てもだれに入れていいか、「この人!」という人がいなかったの、投票率が低いわけが分かった気がする。
- ・政治に対する意識が高まった。18歳で選挙権をもらったら、必ず投票したい。棄権する大人にはなりたくない。
- ・自分の入れた一票で当選者が決まるのかと思うとワクワクした。自分が選挙権をもつ年齢になったら、絶対に行こうと思う。
- ・手間がかかりそうだな…とっていたけれど、全然そんなことはなくて、さっさと終わって意外だった。
- ・早く選挙権が欲しいと思った。国民の声を反映させるためには、選挙に行くことが大切だと改めて思った。
- ・実際に投票している人も候補者の中から適当に選んで、投票している人がたくさんいるのではないかと思った。少し面倒くさいと思った。
- ・最初は少し関心があったが、投票する時は特に意味もなく投票してしまった。たぶん、まだ若いうちは投票に行くことはないと思う。

- ・投票の主な手順が分かり、勉強になった。とても簡単なことなのに、なぜ投票に行かないだろうと疑問に思った。
- ・いざ投票しようとなると誰に入れたらいいか分からなくなった。
- ・模擬選挙をやったことを親(主に母)に話したところ、最近政治に関心があるそうでいろいろ話せた。良い機会になったと思う。
- ・候補者が掲げている政策が被っていることがあったので、とても悩んだ。
- ・実際の18・19歳の投票率が低いことがとても残念だった。また、次の選挙でもこのような模擬選挙をやってみたい。
- ・投票日が複数あってよかった。
- ・思ったより本格的だったので、大人になったらこうやるんだなという実感が湧いた。
- ・実際に選挙公報を読んで投票するのが楽しかった。
- ・「選挙」というものが身近に感じられた。
- ・政治がよくわからないが、自分の1票で投票率が決まってくるので、1票は大切なんだと思いました。
- ・投票すること自体はとても簡単だったし、候補者についても、公報を見れば人柄や政策についてよく分かったので、選挙権を持ったらぜひ投票したいと思った。
- ・それまでは、選挙に興味がなく有権者になっても投票に行かないつもりだったが、今回の模擬選挙で少し関心を持つことができた。
- ・自分の持つ一票の重さがよくわかった。これからの日本がどうなっていくべきか、しっかりと考える必要があるなと思った。
- ・初めてやったけれど、本物ほくておもしろかった。候補者の政策をしっかりと全体をみれなかったので、次ある時はもう少し注意してみたい。
- ・今回初めて投票を体験してみて、意外と簡単であっさりしているなと思った。実際に行くかと言われると行かないと思う(候補者のかかげる政策がどれも実現できるとは思わない)。
- ・やるって決まった時は、あまり気が進まなかったけど、いざ選挙公報が配られると、興味がわいてきて、自分で調べたりすることができました。楽しかったです。
- ・いつもはあまり興味を持っていなかった選挙特番を食い入るように見てしまった。
- ・選挙がどのようなものかということは分かった。しかし、今回は特に「この人に入れたい」と思うような人はいなかった。
- ・候補者の何をどう評価して投票すればよいかを考えるのが難しかった。
- ・校内放送で投票を促されるのは、圧迫感があった。

4. 成果と課題

(1) 模擬選挙について

今回、新たな試みとして、「実際の選挙」に合わせて投票する模擬選挙を実施した。一からの計画・実施は、決して楽ではなかったが、係の生徒の協力も得ながら、無事滞りなく実施することができた。今回の取り組みについては、読売新聞から取材を受け、実際に新聞にも掲載された(注5)。

模擬選挙実施後に生徒にとったアンケートを見ても、前向きな感想が多く見られた。感想を読んで特に多かったのが、「実際の選挙の流れを知ることができた」「初めて実際の政策を見ていろいろ考えることができた」などというものであった。「架空の選挙」でも学ぶことができる選挙の流れ・しくみのみならず、実際に一票を投ずる上で真剣に候補者を吟味する様子が見受けられ、当初の目的はおおむね達成できたと評価できると言えよう。

課題としては、まず、「実際の選挙」は、学校現場にとって都合の良いタイミングで行われるとは限らないことである。長期休業中や試験期間中などに選挙期間が被る可能性もあるからである。その場合は、選挙後に模擬選挙を行うという方法も検討せざるを得ないだろう。二点目は、いかに関心を高められるかということである。今回は、選挙権年齢の引き下げが行われた初めての選挙であること、また、本校にとっても初めての企画であったことから、物珍しさもあり、生徒の関心も高かったが、今後はマンネリ化しないように工夫が必要であろう。三点目は、模擬選挙はあくまでも手段であるということである。日ごろの授業等の中でも社会に対する関心を高める工夫がより一層必要になるであろう。

(2) 副教材の活用

2015年に配布された副教材を今回の模擬選挙の実施にあたって活用した。副教材は、2015年の公職選挙法改正を受けて配布されたもので、学校現場にとっては唐突感はあるが、副教材の内容そのものについて、筆者は肯定的に捉えている。選挙のしくみだけにとどまらず、実践的な学習活動やQ&Aなども盛り込まれており、充実した内容となっているからである。しかし、副教材に掲載されている実践的な学習活動をすべて実施することは、年間指導計画を考えると不可能である。実際に、2016年に実施した「主権者教育(政治的教養の教育)実施状況調査」の結果を見ても、5時間以上の指導時間を確保する予定である答えた高等学校は1年生・2年生・3年生すべてにおいて約1割程度であった(注6)。

従って、副教材の内容から一部選択して取り組まざるを得ないのが全国の教育現場の現状である。将来的には、新学習指導要領で設置が想定されている「公共」の授業で、主権者教育の充実をはかることが、最善策ではない

かと筆者は考える。

(3) 最後に

今回の試みを踏まえ、今後は地方自治体の首長選挙(名古屋市長選挙など)で地域の諸課題を学びながら模擬選挙を行うこと、あるいは副教材に掲載されている「模擬議会」や「模擬請願」に取り組むというのも新たな試みとして想定できるが、いずれにせよ生徒参加・体験型の主権者教育には継続的に取り組んでいきたい。

【参考文献】

『私たちが拓く日本の未来』総務省・文部科学省、2015年
『私たちが拓く日本の未来 活用のための指導資料』総務省・文部科学省、2015年
林大介『「18歳選挙権」で社会はどう変わるか』集英社新書、2016年

【参考サイト】

模擬選挙推進ネットワーク (<http://www.mogisenkyo.com>)
総務省 (<http://www.soumu.go.jp/>)
文部科学省 (<http://www.mext.go.jp/>)
愛知県選挙管理委員会 (<http://www.pref.aichi.jp/senkyo/>)

【注】

- (1) 林、前掲書、135～136頁
- (2) 林、前掲書、136～137頁
- (3) 日本のことを大切にする党
- (4) 実際の選挙結果については、愛知県選挙管理委員会ホームページに掲載されている開票状況を元に得票率を算出した。
- (5) 読売新聞7月8日付朝刊
- (6) この調査は、文部科学省の主権者教育の推進に関する検討チームが、2016年4月～5月にかけて全国全ての高等学校、特別支援学校高等部を対象に実施したものである。

